

## 聖なる両義性

—現代ナイジェリアにおいて変わりゆく宗教の様相—

ジェイコブ・オルポナ<sup>1</sup>  
(翻訳：上村岳生<sup>2</sup>)

ここ数年、イスラム過激派ボコ・ハラムによる度々のキリスト教徒襲撃によりナイジェリアの国内情勢は極めて不安定である。しかしこのような宗教対立は、一昔前には存在しなかった。では何がナイジェリアを変えてしまったのか。ナイジェリア出身、現ハーバード大学教授が問題の根源をつきとめ、融和への構想を語る。(末尾に解説付)

<sup>1</sup> Jacob K. Olupona : ハーヴァード大学神学部教授  
平成 27 年度日本学術振興会外国人招へい事業(短期)にて筑波大学に1カ月滞在。  
研究課題「アフリカ宗教と日本宗教の比較研究——ヨルバ宗教と神道の対話」(受  
入研究者：筑波大学人文社会系木村武史)。本論文は、筑波大学、東京大学、京都  
大学にて行った講演原稿に基づく。

<sup>2</sup> うえむらたけお：東京大学大学院博士課程

## はじめに

ナイジェリアが世界で最も宗教的な国の一つであることは、統計的な情報とともに、人口学的にもはっきりと証明されている。相当数のナイジェリア人は、民族ごとに土着の宗教的伝統を守っているとされている。だが学術的文献によれば、宗教実践上、ナイジェリア国民はキリスト教徒とイスラム教徒にほぼ半々に分かれており、それぞれはさらに教派や分派に分かれている。またナイジェリアの事例に関しては、世俗化は多くの社会や文化にますます普及していくという社会理論家の主張が適切に当てはまらないことが実証された。むしろ明白なのは、ナイジェリアの宗教団体と運動の多くが20世紀後半から21世紀初頭に急速に成長したということである。宗教の発展と、それがナイジェリアでたどった形態は、実はナイジェリアの現在の政治的困難の主要な原因となっている。例えば、国づくりの基盤として伝統的な宗教的価値が役割を果たすと見なされなくなったことは、その原因の一つである。

ここでは、現代ナイジェリア国家の形成において、キリスト教、イスラム教、土着信仰といった宗教諸勢力を不可欠なものとしてきた構造的、歴史的过程に焦点を当ててみたい。ナイジェリアは、アフリカ諸国のなかでも最大の人口を持ち、文化的・民族的に最も多様であるという点で、ユニークな存在である。またナイジェリアは、キリスト教徒とイスラム教徒の数がほぼ拮抗している世界最大の国でもある。絶え間ない宗教紛争のような分裂の危機にもかかわらず、マリやソマリアのようなより小さい諸国が分裂したのに対して、ナイジェリアは国家的、領土的統一を保持してきた。

本稿では、ナイジェリアが「適度に宗教的」であった1960年の政治的独立以後の、ナイジェリアの発展における宗教的な緊張、対立、共存と和解というテーマを強調したい。とりわけ1980年代から起こった変化を見てい

くことで、ナイジェリアにおいて現代の宗教の状況が大きく変わったことを論証し、さらに、この国における宗教の将来の展望を論じたい。

## 1. ナイジェリア独立前夜の宗教

考察を始めるにあたり1960年代を基準点にすると、ナイジェリア独立の時期は、文化的・宗教的なナショナリズムによって特徴づけられる。土着宗教はアフリカ人の社会的・文化的な世界観の核心をなしており、そのことは少なくとも三つの異なる文脈において認めることができる。一つは、宗教的とも俗的ともみなされるような儀式や祭り、式典によって伝えられ行われてきた祖先崇拜の重要性である。ほとんどのナイジェリア人がキリスト教とイスラム教を受け入れた後でさえ、祖霊信仰は残った。なぜならそれは、王権および親族の伝統と結びついていたからであり、そのため祖霊信仰は宗教よりも文化に関わるものになった。地域一帯を保護するだけでなく、日常実践とも結びついた聖なる王権の伝統も重要である。土着宗教は神々との関係という点で重要であるのに対し、宗教としてのキリスト教とイスラム教が土着宗教に及ぼした影響もまた顕著である。キリスト教とイスラム教が強い地域であっても、祖先の世界は人々の世界観において支配的であった。祖先からの伝統が、帰属場所、民族的・宗教的アイデンティティの感覚をナイジェリア人に与えたからである。当時は土着宗教が優位であったことから、伝統的な名前を普通にみることができた。名前につける語は通常、家族と個人、集団の氏族神を表していた。

また、伝統的な価値体系は人々の生活と意識の中心を占めていた。拡大家族システムと共同体の価値は尊重され、タブーやトーテムなどに人々は従っていたが、それらが時代遅れ、あるいは反近代的とみなされることはなかった。イスラム教とキリスト教は力をもっていたが、これらの新しい宗教は当初、伝統的な信仰実践を掘り崩すようなことは何もしなかった。

「自分も生き、他も生かす」精神があったのである。伝統的な祭りや地域の祝いごとは、個人をより大きな共同体に結びつける機会を提供するため

に奨励されていた。また当時はミッション・スクールの時代でもあった。そこでは、市民教育として伝統的価値と土着言語を教えることが推奨されていた。日曜学校の研修はそれを補完するものだった。そこでは、聖書を題材にした教訓劇が子供たちに責任ある市民、そして良きキリスト教徒になることを教えた。イスラム教徒も同じような教育プログラムを提供していたし、アフリカのイスラム教はキリスト教よりも土着宗教に寛容だったという人たちもいる。青少年教育の重要性を認識していたこの時期の指導者たちは、市民生活に有益な指導を受けることのできる、教会またはモスクと連結した青年団を創設した。またこの時期、主流派教会のような宗教団体は、国家の政治的、社会的、経済発展において重要な位置を占めていた。それらの宗教団体は市民社会の重要な一員とみなされていただけでなく、後に国を指導し国家エリートと呼ばれるようになる人々を輩出する責務を自ら担っていた。

1960年を過去の宗教的秩序を検討するための基準点とみなすならば、1980年代、特にその後半または1990年代初頭は、新たな秩序の始まりであると私は考えている。その時期のナイジェリアでは、冷戦後に民主的政府が再登場し、軍事独裁政権が最終的に終焉した。我々はこの時期を、新しい共和国の始まりと考えることができる。またそこに、ナイジェリアにおける宗教の現在の様相の起源を見いだすことができる。

## 2. 歴史的な軌跡

ナイジェリア独立の黎明期である1960年には、三つの宗教的伝統があるという確固とした認識が国民にあった。それらは独立後に確立された政治的・社会的・文化的制度のなかに浸透していった。ほとんどの国家行事は神への祈りとともに行われたが、それは、市民が神を三つの宗教と350のナイジェリアの民族集団の公分母とみなしているという想定があったためである。1960年10月にナイジェリア放送によって企画されたボラジ・イドウ(Bolaji Idowu)教授のナイジェリア独立記念講演「ナイジェリア人の信仰と実

践における神」は、ナイジェリア国の建国者たちによって明確に結びつけられた三つの宗教の伝統を言い表したものだ。その当時、諸宗教の間に衝突はあったにせよ、ここ数十年にナイジェリアで見られるような継続的紛争には至らなかった。また独立時代には、ナイジェリアの指導者たちが社会発展にとっての価値観と文化の意義を認め、芸術や文化、伝統文化教育や医療の研究を人文・社会科学の学者に求めることによって、ナショナル・イデオロギーが共有されていた。建国者たちは、近代化は西洋化と同じものではないと認識し、宗教を含めたアフリカ文化が独自の近代化の形を展開することができると確信していた。1977年に、芸術と文化の祭典（Festival of Arts and Culture: FESTAC）として知られる画期的な会議が開催された。アフリカの伝統の権威を再確認し、この伝統的諸価値を国家発展のために推進すべく、ゴウオン中佐の下でラゴスに多くの在外アフリカ人が集まった。これは、我々の国民生活における一つの分岐点であった。

しかし、独立時代に始まる諸宗教間の連帯強化をめざした宗教多元主義の賞賛すべき試みは、1970年代後半に崩壊し始めた。土着の価値観と文化を非難する近代化・西洋化の新たな信奉者が突如現れてきたことが、この変化をもたらしたといえる。それまで土着信仰は、ローカルな価値観と世界観によってナイジェリアの集団的アイデンティティを満たすことにより、今よりも活発な役割を演じていた。アフリカの神話、儀礼と象徴に根づいた民族文化間の結びつきは、キリスト教とイスラム教はアフリカ化されることなしには正統性を得られない、非土着の伝道された信仰であるということを感じさせてくれた。これは、イスラム教とキリスト教にもっと寛容になることを促した。ナイジェリアの文化的記憶の中の土着の要素は、イスラム教とキリスト教の間の緩衝物となっていたのである。

しかし1970年代後半には、多くのナイジェリア人が、土着の文化を国の現代世界への発展を妨げる敵であるとみなすようになった。このことは、国が混沌へ陥り始めているとき、ナイジェリアの宗教史における決定的な転換点となった。特に内戦後の時代、様々な軍事政権指導者の下での国づくりによりナイジェリアが着手し始めた時期には、土着の価値観の崩壊と、1960年代から1970年代初頭にみられた他宗教に対する寛容と相互協力とい

う美德の衰退がみられるようになった。FESTAC以後の時代には、誤った国家政策と一体化したひどい汚職が、国はすべての宗教に寛容であるという人々の確信をぐらつかせた。このことは宗教的狂信主義を含む、派閥政治の要因になった。こうした新しい状況のなかで、二つの有力な宗教的党派—キリスト教とイスラム教—が台頭してきた。私の見るところ、土着宗教の周辺化は、近代化と世俗化によるものではなく、国づくりという複雑なプロジェクトにおいて宗教、特に土着の価値観の適切な役割を国家が把握できなかったことによって引き起こされた。キリスト教とイスラム教の宗教純粹主義者はどちらも、彼らにとっては異教の承認となるFESTACの黒人文化と伝統の祝祭に反対した。そして、FESTACに対する反動の動きは、伝統的価値をおとしめ、キリスト教徒とイスラム教徒の熱狂を引き起こした。これに対し軍事政権は何も出来なかった。政治指導者たちがイスラム教徒とキリスト教徒の地理的配置を権力の強化に利用していたためである。このことに関連するのは、黒人文化よりアラブ文化を重視し、新たなイスラム主義を推進する、一部の中東諸国の大使館の高まりつつある影響力であった。皮肉にもそれは、1950年から60年代にナイジェリアのナショナリズムとともに盛んになったアラドゥラ(Aladura)<sup>(1)</sup>のような土着のキリスト教の影響力が衰え、より活発で刺激的な福音主義ペンテコステ派とカリスマ運動がそれに取って代りつつある時期のことであった。ちなみにアラドゥラのキリスト教は、キリスト教の枠内で伝統的価値を奨励しており、アフリカのキリスト教が西洋のキリスト教と同様に豊かで真正なものでありえるということを世界に証明するものである。

より広いイスラム的局面では、故シャイフ・アブバカル・グミ(Abubakar Gumi)はサウジアラビアのイスラム教ワッハーブ派との強い関係を背景に、北部のイスラム教徒に対し影響力の大きな発言をした。彼は正統なイスラム教の新しい解釈を普及させるため、土着的要素を持ったスーフィーの実践を根こそぎにし、近代化の口実の下で様々なイスラム教徒の集団を統一するという計画に乗り出した。グミの発想は、後のイスラムによる支配の希求と世俗主義・世俗的国民国家の否定の論拠を提供した。

1980年代には、ナイジェリアの宗教的様相に重要な転換がみられた。土着のキリスト教は二つの理由から魅力を失い始めた。一つは、グローバル化したペンテコステ派・カリスマ主義キリスト教が地元のキリスト教的伝統を中傷し、宗教を装って外国の文化的価値を推進したこと。第二に、このキリスト教運動の勃興が、ナイジェリアの景気の失速と同時に起こったことである。その時期には通貨が下落し、国はIMFと世界銀行という支配者によって、悲惨な貧困を生み出す構造改革政策とIMFの貸付を強制された。このことは宗教的实践が爆発的に増加する原因となった。なぜなら、民衆が困難の解決を求めて、教会に目を向け始めたからである。だが残念なことに、既存の教会はナイジェリアの貧困を引き起こす根本的な経済問題に対処できなかった。それに対し、富を約束するだけでなく、社会サービスも提供することで、ペンテコステ派は恵まれない人々にとってますます魅力的なものとなった。これによって人々は、宗教に実利を求めるようになった。

### 3. 市民宗教

ナイジェリアの宗教の歴史を理解するためには、市民宗教(civil religion)の概念を参照し、それが我々の議論にとって核心的なものであることを明確にする必要がある。社会学者ロバート・ベラー(Robert Bellah)は、それなくしては社会が成り立たない、人々を結びつける聖なる原理および根本的倫理として市民宗教を理解する。市民宗教は、社会の集団的アイデンティティの感覚と関連する共通の神話、歴史、価値、シンボルを体現するものである。ナイジェリアの伝統的なヨルバ族社会に関していえば、聖なる王権は共同体のアイデンティティの絆を作りだすことで、三つの主要宗教の信者を包み込む聖なる天蓋を形成した。見えない信仰としてのナイジェリアの市民宗教が、いかにして個々の文化的信仰集団を乗り越え、ナイジェリア国家の象徴に国民的な宗教的意義を与えたかを、私は別の著作で検討したことがある。

宗教多元的な社会における市民宗教の存在が、従来の宗教的伝統の消滅を必要とするわけではないということは強調されるべきである。組織としての宗教は、実際にも、国民の想像の中でも、成長し続ける。ナイジェリアであれば、国づくりの議論においてであろうと、ボコ・ハラム(Boko Haram)<sup>9)</sup>の暴力、世俗主義またはイスラム法(シャリーア)においてであろうと。私は宗教というものを、制度的枠組みに留まらない、信仰的伝統の人間的で文化的な次元を含むものとして理解している。別の言い方をすれば、私は宗教を聖なる現象としてだけでなく、文化的で人間的な現実として研究している。その際、常に社会・政治的次元を念頭に置いている。

したがって私は、私的および公的な空間の両方における宗教の存在を探究している。ユルゲン・ハーバーマス(Jürgen Habermas)は、「国家、経済や家族とは区別され、誰もがお互いに市民個人として共通善について議論できる社会的空間<sup>10)</sup>」として、公共圏を理解した。宗教の役割の一つが、人間の存在に意味を与え、社会に役立つ知と力を得るために聖なるものに関わることにあるならば、公共圏は宗教が活動する舞台を提供する。アフリカの政治機構を変えた西洋民主主義の影響も、公的・政治的生活からの宗教の排除や、宗教ぬきの世俗的公共圏の構築を導くことはなかった。アフリカに根づいた宗教的アイデンティティは、それが伝統的、キリスト教的、イスラム的であるかにかかわらず、宗教、文化、社会の徹底的な分離を支持しない。アフリカとアフリカ人は、今日我々が「宗教」として理解するものを、常に日常生活の活動と結びつけてきた。このような宗教観は、国民国家の道德秩序のなかに根底から入り込んでいる。つまるところ、公共圏における宗教の役割を否定するのではなく、宗教的意味が創造される場として、公共圏を再考する必要があるのである。

#### 4. ナイジェリアの三つの宗教的遺産

現代のナイジェリアでは、イスラム教とキリスト教が主要な役割を果たすようになっているが、それでも土着のアフリカ宗教はいまだに人々の魂



の核心をなしている。多くの人々は、地方でも都会でも、ナイジェリア人の政治的な生活がアフリカの霊性と密接に絡み合っていることを確信している。私が幼い頃、福音派キリスト教と急進的イスラム教が我々の価値体系に入り込むずっと前、ナイジェリアは宗教的寛容、宗教間の礼節、ダイナミックな宗教混交の場であった。60年代初頭に私の町で初めてイマームがメッカ巡礼を成し遂げたとき、地域コミュニティは皆でそれを喜び、私の父の教会で祝ったほどである。なぜなら、コミュニティの中から最初の巡礼経験者を出すのは素晴らしいことに思われたからだ。父の聖公会教会は、町が全ての市民の功績を誇りをもって祝福するための共同空間だった。今のナイジェリアの感覚では驚くことかもしれないが、この文化多元的なコミュニティでは、いくつもの宗教的伝統から教えを受けることに何の疑いも持たれていなかった。

しかし、三つの宗教的伝統の間の有意義な対話は、過去のものとなってしまった。今日、ナイジェリアの宗教的多様性は、キリスト教とイスラム教のイデオロギー闘争のなかでしばしば暴力的に二分割されている。ナイジェリア国は国教を制定せず、公式に採用された民主的多元主義の多民族的、多宗教、多文化的な性質を承認している。しかし、独立ナイジェリアの建国文書と原則は、イスラム的、ユダヤ・キリスト的感性に根ざしたものである。政治指導者たちは、非公式に主要宗教の教会組織を支援し、その宗教的な規範を国家体制に取り込んだ。もちろん、統治者個人や国の代表者が私的空間で自分の信仰を公言することには問題はない。しかし、ある宗教に統治に影響を及ぼすことを認めることは、宗教的少数派を排除するだけでなく、その人が何教徒であるかによって市民権が定義され、政治権力が特定の集団の排他的特権になるという事態を引き起こしてしまう。

## 5. 現代のナイジェリアの国政において信仰は重要か？

社会科学の議論では、世俗主義は政教分離を意味し、国家と宗教の問題はそれぞれ別個に扱われるべきことが示唆されている。確かにナイジェリ

ア憲法は、特定の宗教の優先的な支援を公的に防止するものであり、宗教団体からの支援も禁止している。

しかし、ナイジェリアにおいて宗教が国政の関心事であり続けるかどうかという問いには、はっきりイエスと答えることができる。さもなくば、今でもナイジェリア人が新たに着任した公務員の宗教的背景を知りたがることを説明できない。宗教が我々の政体（国家）の決定的な構成要素であることは、否定できない。

しかしながら、ナイジェリアの政治における宗教の存在感は良し悪しであることも明らかになった。一方で宗教は、とりわけ市民社会、共同体の価値、健康と教育の向上・促進という点で、わが国の社会的発展において傑出した位置を占めていた。こうした有益な社会貢献にもかかわらず、宗教は束縛の一形態ともなった。例えば、宗教は合理的な議論を抑え込み、信仰を守った敬虔な生活だけが国の問題を解決するという考えを奨励する傾向がある。悲しいことに、このことはあらゆる階級でとりわけ目立つようになってきた。いまや宗教的情熱は、貧しくて恵まれないナイジェリア人がみじめな生活状況から逃げ出すことのできる避難場所を与えている。宗教的な熱意はまた、金持ちが神の恩恵の印だと思っている彼らの富を誇示し、貧しい人々からの継続的な搾取を正当化する手段にもなった。現代の宗教は、マイタツィン(Maitatsine)<sup>40</sup>とボコ・ハラムが行ったような、無数の反乱と抗議を生み出した。

ナイジェリアをのみ込んだ宗教的暴力の危機は、宗教（と今日いわれているもの）が、個人と共同体を互いに対立させることを示している。あまりにもしばしば、宗教は政治的な見解を表明する結集点となってしまふ。福音派キリスト教における救済と、イスラム教におけるジハードの言説は、攻撃性の喚起を正当化するのに用いられた。ここ数十年に起きたナイジェリアでの出来事を概観してみれば、そのような宗教による政治介入は、アバチャ国防相の独裁時代にみられた隣国からのイスラム教徒指導者の招聘から、個人的生き残りのために政府高官のあいだで流行した福音派キリスト教への改宗まで、様々である。キリスト教福音派の攻撃性、特に前回の大統領選挙におけるそれは、国家の問題へ不当に影響を及ぼそうとする試

みである。福音派教会の指導者が現職の大統領に見境なく支援していることは、ナイジェリアでは道徳的権威を失った教会の機能不全を露呈している。

さらに深刻なのは、二つの一神教的伝統—イスラム教とキリスト教—のあいだの競合への関心の高まりとともに、かつて我々の社会を束ねる聖なる天蓋となっていたアフリカの伝統的価値に対して国民がますます不寛容になっていることである。ナイジェリア宗教の現代的様相は、とりわけここでの議論にとって決定的に重要な宗教性の二つの形態を含んでいる。それは、福音派・ペンテコステ派のキリスト教と、ボコ・ハラムのイスラム教による暴動である。両者は全く無関係なようにみえる。しかしそれらは、ナイジェリアの持続的存続に対する挑戦を、それぞれのやり方で表明しているのである。

### ナイジェリアにおけるペンテコステ運動と 福音派カリスマ主義キリスト教

これらの新たなキリスト教運動は、初期アフリカ・キリスト教の二つの形態—伝道キリスト教とアフリカ土着の教会—とは異なる、キリスト教の新しい面をあらわしている。アフリカ土着の教会はペンテコステ派の一形態であるというのは正しいが、今のキリスト教運動はそれとは劇的に異なったものである。文書と人々の経験上の証拠はすべて、これらの運動が急速に広がっており、その際、予想をはるかに上回る仕方で個人の生活と集団社会を変えていることを示している。

アメリカやヨーロッパの福音派を観察するときに使うレンズを通してナイジェリアの福音派キリスト教を検討するのは、賢明ではない。このような基準では、ナイジェリア人は保守的なキリスト教徒とみなされることになる。しかしナイジェリアの文脈では、彼らは非常に進歩主義的であるといわねばならない。かつてのナイジェリアのキリスト教グループは伝統的であるとみなすことができるが、より最近のカリスマ運動は、もっと現代的で、リベラルな性向や価値観とより調和的なものとして特徴づけられる。

ペンテコステ派は、起業家精神、民主的プロセス、公の場での意見表明、独立した自発性と対人能力のスキルを促進することによって、近代化の推進に貢献している。こうした諸価値が経済発展とグローバル・コミュニティへの民主的参加に通じている限り、ペンテコステ派は発展途上諸国の社会、特にナイジェリアにおいて、ダイナミックな変化をひきおこす媒体なのである。

ナイジェリアのペンテコステ派の伝道集会は大抵、海外から集められた資金に依存している。それは、礼拝者の大群衆に向けて放送するのに適した技術・機器を据えつけるためにやってくる音響とデジタル・メディアの専門家をとまなっている。このような技術の使用は、大衆にアピールする力を劇的に高めることで、ペンテコステ運動の拡大を助けた。

したがって、学者たちの見解にあるように、このような教会の勃興は急速な近代化とグローバル化に対する発展途上国の直接的な応答である。近代化の過程は宗教の働きと関わりなく起こるという一般的通念にもかかわらず、ナイジェリアのような途上国においては、近代化は実際のところ宗教的な感性と組織によって推進されているのである。これは彼らがメディアや技術を使用するというだけでなく、ペンテコステ派の例でわかるように、貧困緩和計画を通じたいわゆるナイジェリア社会の変革への関与によってそうなのである。ナイジェリアの宗教信者についての人口統計学的研究は、労働者階級で極めて貧しい層が、こうした福音派教会の信者の多数派であるという事実を証明している。

福音派とカリスマ運動の教会は、国民の社会的、経済的、政治的な生活と密接に絡み合っている。これらのグループは、そのナイジェリアおよび世界中の宗教紛争における扇動的な影響から見て取れるように、より大きな権力を求めて国民、国家、地方のレベルで長らく政治を操ってきた。たとえば現在起こっているペンテコステ派とカトリックの政治的対立は、ナイジェリアの全キリスト教徒にとっての包括組織であるナイジェリア・キリスト教連合(Christian Association of Nigeria)の分裂という政治的危機を招いている。学術的な文献のなかでは、これらの教会の多くは非政治的であると特徴づけられているが、彼らを政治的に中立であるとみなすことはでき

ない。典型的な例は、福音派・ペンテコステ派教会による、前回の大統領選挙への直接的関与である。現職の大統領<sup>9</sup>の統治は失敗しており、国を迷走させているとわかっていたにもかかわらず、教会は彼を公的に支持した。彼が神に会いに行くといっってイスラエルに巡礼した際には、多くの福音派の指導者が同行した。

これらの教会は、性、ジェンダー、そして人権に関する国家政策にも重要な影響を及ぼした。同性愛に厳しい罰を課すための法案を下院において発案したことは、その一例である。ここでの私の関心は、アフリカの同性愛について論争を引き起こすことではなく、これらの教会の影響力の範囲を明らかにすることである。実際、福音派及びカリスマ運動教会の国家に対する影響力は、北部ナイジェリアにおけるイスラム法擁護者のそれに匹敵すると考えることができる。これらのグループは、北部におけるイスラム主義者の強固な存在感と、南西部の相当数のイスラム教徒と競い合っている。こうした福音派キリスト教のグループは、北部では勢力が弱いことから、ボコ・ハラムの格好のターゲットにされている。その状況は、とにかく自分の身を守れとキリスト教の指導者たちが信徒を励ましているほど緊張している。特定の地域では、民族的・宗教的な対立がイスラム教徒とこれら福音派キリスト教徒の暴力的衝突に発展している。その上、福音派キリスト教徒は土着宗教を信じる人々とも対立しており、時には南西部のヨルバ族の主要な都市で行われる土着の宗教・文化的行事を妨害したりさえする。

## ボコ・ハラム

ボコ・ハラムは、疑いなく、ナイジェリアの宗教的暴力の新たな面である。この運動は不可解であり、そのナイジェリア北東部とその近隣諸国における勃興と没落、その後の再興は、大きな謎のままである。2009年にひそかに始まった運動は、今では国の北部において驚くべき範囲に広がり、様々な襲撃事件を引き起こして何百人もの死者を出している。この集団が2014年にボルノ州のチボクにある女子学校を襲撃し、200人以上の十代の女

の子を誘拐したとき、ボコ・ハラムの悪名は世界中に知られるようになった。彼女たちはいまだに見つかっていない。ナイジェリアでおよそ2000人あまりの女性と少女がボコ・ハラムの潜伏場所から救出されたときでさえ、チボクで誘拐された女の子は一人もいなかったことが確認された。政府施設や無防備な町や村に対するボコ・ハラムの残忍な襲撃は、国家治安部隊の無力さを露呈しただけでなく、市民に安全を提供すべき国家の怠慢と、この規模の暴動に対処する能力が国家にないことを示すものでもある。

ボコ・ハラムは、その地域一帯における、広範囲にわたるイスラム的暴動の一つであり、弱い国家を露呈させるものであった。彼らの目的について細かく検討することは、本稿の議論の範囲を超える。ただし言うまでもなく、その活動は地域の人々に筆舌に尽くしがたい困難を強いている。

## 6. 現在の宗教の様相とその未来

ナイジェリアの将来を展望しようとするなら、我々はナイジェリアの宗教的組織や団体がナイジェリア市民社会で果たすことのできる重要な役割をもう一度考えてみる必要がある。宗教団体は、有力な社会的資本・宗教的資本を所有することで、ナイジェリアで最も強力な「利益共同体」の一つとなっている。それらの資本が適切に使われるならば、宗教団体はナイジェリアの市民の生活に有意義な影響を及ぼすことができる。

ナイジェリアの現在と未来の考察から、宗教が国の国家形成プロジェクトに寄与できるいくつかの方法を見い出せるように思われる。一つに、宗教的リテラシーの向上は何としても必要である。つまり、改宗や教化を目的とせず、ナイジェリアの若者を国の多くの宗教的伝統と文化的遺産に触れさせるのである。それをどのように教えるかが、我々のめざす宗教的リテラシー・プログラムの成功の鍵となる。また宗教は、かつてそうであったように、女性が国づくりに貢献することのできる領域を作り出すことができる。学界は、宗教と国づくりに関する批判的思考が許容される、十分に資金を持つ研究施設の設定を急がねばならない。

また我々は、信仰の公的表現と私的表現の区別を維持していかなければならない。首長や王のような共同体の伝統と文化の管理人は、原理主義的キリスト教やイスラム教への熱心な個人的支持を、公共的な信仰の議論と混同してはならない。市民の指導者は、（これまでみたように）その役職ゆえに公私ともに生活のなかに宗教が浸透している国民の様々な信仰共同体を統轄することを受け入れなければならない。彼らはそのようにして、折衷的な諸伝統が共存できる聖なる天蓋を提供しなければならない。宗教は、ナイジェリアの市民を無知から解放し、市民が道徳的間違いを犯したときに、それについての説明責任を市民に負わせることができる。

第三に、危機の際だけでなく平和な時においても、宗教間対話を促進し、それに参加していくことが諸宗教グループにとって重要である。中立性を確保するため、国家ではなくNGOによってそのような取り組みが支援されるべきである。さらに、政治的・社会的な行動のため、包括的な聖なる空間をもたらす市民宗教を作り出さなくてはならない。国民は、ナイジェリアの集団的なアイデンティティに関する記号、儀式、歴史と象徴を普及させ、強化していかなければならない。また市民宗教は、国民国家の一つの聖なる天蓋の下で、多民族的、多文化的、多宗教的な人々が共存できることを保証する先見的な指導者を求めるものである。

#### <解説>

本論文でとくに興味深い点は2つある。ひとつは、ナイジェリア国内の宗教対立は、主として近代化という要因により、最近になって発生し深刻化したと指摘されていること。ボコ・ハラムのようなイスラム過激派は、西洋的価値観に対する極端な反動として説明されることが多いが、むしろ近代化による土着伝統文化の否定こそが、キリスト教にせよイスラムにせよ急進的な勢力の台頭を促したとされている。

もうひとつは、日本や欧米社会では懐疑的に見られることが多い、「一つの宗教で社会をまとめる」方法こそが、ナイジェリアを窮状から救うという考えである。その「一つの宗教」とは、キリスト教やイスラムといった特定の宗教ではなく、それらを包み込む聖なる天蓋としての「市民宗

教」、すなわち、キリスト教にもイスラムにも共通する「神への信仰」と、アフリカの宗教文化的伝統を合わせたものである。1970年代初頭までのナイジェリアには、そのような市民宗教が自然に存在し、諸宗教が共存していた。近代化が進行しても信仰心が衰えることのないナイジェリア人を統合するには、市民宗教の復活しかないというのがオルポナ氏の結論である。

本論文は、2015年の来日時講演原稿だが、質疑応答の際には、ナイジェリアでオルポナ氏自身が関わった宗教間対話の取組みも紹介された。それは、キリスト教とイスラムの教義などの相互理解というよりも、共通の課題の解決に向けて団結するものであった。例として出されたのはHIV感染の問題に取り組むフォーラムだった。その場には、キリスト教とイスラムの代表だけでなく、土着宗教の代表も招かれた。それまでは、急進的・近代的なキリスト教徒やイスラム教徒は、土着宗教を邪教として軽蔑してきた。ところが、このフォーラムでは、蔑まれてきた呪術師が、HIV感染に詳しい専門家に早変わりしたのである。というのも、土着宗教の呪術師とは、ナイジェリアの伝統文化では、民間の医師でもあるため、キリスト教の牧師やイスラムのイマームにはない知識、いや、欧米から来た医師にもない、現地の患者に関する臨床的知識を豊富に持っていたからである。そのような場を作る上での知識人の役割を強調するとともに、氏は、日本の伝統社会での諸宗教の共存のありかたにも強い関心を示していた。

(文責：編集委員 藤原聖子)

## 注

---

① (訳注) ナイジェリアで形成された独立教会。祈祷や悪霊祓い、信仰治療などを特徴とする。

② (訳注) ナイジェリアのイスラム過激派組織。現地語で「西洋の教育は罪悪」という意味。

③ Judith Butler, Jürgen Habermas, Charles Taylor, Cornel West, ed. Eduardo Mendieta and Jonathan VanAntwerpen, *The Power of Religion in the Public Sphere*, Columbia University Press, 2011: 2. (ユルゲン・ハーバーマス ほか著、エドゥアルド・メンディエッタ、ジョナサン・ヴァンアントワーペン編、箱田徹、金城美幸訳『公共圏



---

に挑戦する宗教：ポスト世俗化時代における共棲のために』、岩波書店、2014年)

④ (訳注) モハメド・マルワ(Mohammed Marwa)の別名。預言者を自称し、1980年代にナイジェリア北部で宗教暴動を組織した。

⑤ (訳注) ナイジェリア連邦共和国第14代大統領であるグッドラック・エベレ・ジョナサン(Goodluck Ebele Jonathan)。任期は2010年5月5日から2015年5月29日。